宗門校トピックス

聖地で学ぶ彫像技術

身延山大の仏像「工房」 学生ら「迷わず進学」

手本は自立した職人の先輩

日蓮宗宗門校の身延山大（山梨県身延町）にある仏像工房が注目されている。学生が彫像を学ぶだけでなく、卒業生の職人グループ「彫玄」が全国の寺社からの依頼で仏像修理・制作を請け負う。日蓮聖人棲神（せいしん）の霊地という環境に加え、職人として独り立ちした先輩から実地に学べるとあって、工房を目指して進学する学生が相次いでいる。（有吉英治）

正式名称は同大国際日蓮学研究所・仏像制作修復室だが、関係者は皆親しみを込め「工房」と呼ぶ。キャンパスの奥まった場所に立つ房舎は小ぶりな体育館を思わせ、屋内には解体された仏像、鑿（のみ）や玄翁などの工具、にかわや絵の具が並び卒業生と在学生が同じ空間で仕事を進めている。

工房が設けられたのは20年ほど前。仏師の柳本伊左雄・特任教授が、学生が自由に作業できるようにと開放し、仏像の仕事を志す卒業生が残るようになった。現在職人として働く卒業生は8人。初めは柳本特任教授が受注した仕事を分担していたが、徐々に仕事ぶりが認められ10年ほど前から工房や個人に注文が入るようになった。

寺社から依頼された仏像の修復が行われている身延山大の「工房」

昨年12月に落慶した日蓮宗鎌倉日蓮堂（神奈川県鎌倉市）の宗祖辻説法像もこの工房が手掛けた。日蓮宗以外からの依頼も増えており、現在は4年先まで仕事が埋まっている。

ここでの指導は昔ながらの見て盗むスタイル。手取り足取り教えることはない。「技術の習得はスタディーではなくエクササイズ。時間と体を使ううちに少しずつ身に付いていく。自分の頭で考えて、いろいろ試しながら上達するしかない」と柳本特任教授。

大学の講義で仏教思想や美術史を学び、工房での作業を通じて造仏に必要な技が体得できる。2年前に編入学した岡村明子氏(42)は「聖なる地で寺社の宝物に触れられる。ほかにはない恵まれた環境」、昨年入学した手塚真稔氏(19)は「小学生の頃から工芸の仕事がしたくて、迷わず身延山大を選んだ。毎日授業が終わるとすぐ工房に来る」と笑顔を輝かす。

しかし仏師で暮らしを立てるのは容易でない、と柳本特任教授は指摘する。「伝統工芸の職人がどんどん廃業している。技術を継承するには、適正な価格で仕事を頼んでもらえるようにならないと」。制作の腕だけでなく仕事の受注や情報発信などプロデューサーとしての力量も必要という。

工房は、ラオスの世界遺産ルアンパバンで行う仏像修復事業でも高い評価を得ている。千体以上の仏像を調査し、すでに100体近くを修理した。2006年卒の鈴木義孝氏(38)は派遣チームのマネジメントを任されたことがある。「予算を全額渡され、調査費から食費まで全て管理した。知らない土地で大変だったが、またとない経験をさせてもらった」と振り返る。これも現場教育の一環だった。

ラオス・プロジェクトは当初、不可能だと周囲に反対された。柳本特任教授は「何事も無理だと思ったらできない。思い込みをなくし、やってみようという気持ちにさせることが自分の役目かも」と話す。

10月に東京・銀座のギャラリーで展示会を計画している。仏像造りは様々な技術の結晶。漆芸や截金の技法を駆使した茶器などを展示し、工房で日夜磨かれている腕を披露する。

談話室

龍谷大 入澤　崇学長

独自の「仏教SDGs」推進

「浄土真宗の精神」を建学の精神とする大学として誰一人取り残さない社会を目指すSDGs（持続可能な開発目標）と、阿弥陀仏の誓い「摂取不捨」に共通点を見いだし「仏教SDGs」を推進している。コロナ禍を、社会の在り方やSDGsの大切さ、「教育とはどうあるべきか」の本質を見つめるチャンスと捉え、大学や学生の可能性を追求し続ける。「大学を卒業して社会に出るのではなく、学生も社会の一員であることを自覚し、SDGsなどを自分事として捉える意識の持ち方が今求められている」と話す。

「学生の社会意識の高まりを感じている」と話す入澤学長

大学独自に「SDGs宣言」や「カーボンニュートラル宣言」を発出し率先して社会課題に取り組む一方、学生が社会課題の解決を目指した靴磨きビジネス「革靴をはいた猫」などの企業を輩出している。

また行政や地域、企業と連携した取り組みも多く、農学部が滋賀県米消費拡大推進連絡協議会と連携して近江米の若者向けPR動画を制作・公開した事例などもある。

昨年12月には、優れたブランディングを実行する組織等を評価する「Japan Branding Awards 2021」で最高位の「Best of the Best」を大学として初めて受賞した。「大学は企業とは性格が異なるが、どのようなビジョンを持ち、何を行っているかを社会にアピールする必要がある。いわば『社会との約束』が大学のブランディング事業と考えている」と話す。

今後については「大学の役割や使命は、一般にまだ十分に浸透していない。存在意義を改めて打ち出すとともに『自分たちが未来を切り開く』と意識できる学生を育て、入学してよかったと思われるような大学にしたい」と語った。（渡部梨里）

建学の精神を生徒に

花園中高新1号館竣工式

竣工した新1号館で行われた式典

花園学園創立150周年記念事業として建て替えられ、臨済宗妙心寺派の宗務本所が移転した花園中高新1号館（京都市右京区）の竣工式が2月15日に行われた。第14・2次定期宗議会の前日に挙行され、小倉宗俊管長を導師に開山無相大師像の安坐法要を営み、続いて生徒の坐禅指導などに使用する4階の宗教講堂で式典を行った。

学園理事長を務める野口善敬宗務総長と溜剛・花園中高校長が挨拶。

野口宗務総長は「建物は建てるのが目的ではなく、何に使うのかが大切」と強調。「身和同住」「口和同黙」「意和同悦」との言葉を掲げ「なかなか異種の業種が入るとうまくいかないが、付和雷同ではなく、心底仲良くなれる関係を」と願った。

溜校長は「新1号館を、建学の精神である禅の心を生徒たちに伝えていく非常に大きなツールとして使えることを大変幸せに思う。宗務本所の皆さんから知恵や経験を頂き、宗門校としてより磨きをかけた教育を行っていきたい」と誓った。

創立150周年実行委員長の松井宗益最高顧問は終了宣旨として「度重なる大戦、大災害、大きく変わる国の制度の中、本派も学校も先人の方々のご労苦は並大抵ではなかったことは想像に余りある。その方々の思いにどこまで応えているのか私自身振り返ると誠に忸怩（じくじ）たるものがある。150周年を契機に本派も学校もますます活発に大きく飛躍されんことをお祈りする」と期待した。

この後、参列者は実際の授業が行われている館内を見学した。

新1号館は鉄筋コンクリート4階建て。建築面積は約1074平方㍍、延べ床面積は約3669平方㍍。松田平田設計が設計監理を行い、淺沼組が施工した。1、2階の東側半部と3、4階の全フロアを中高が利用し、1、2階の西側半分に宗務本所が入居している。（河合清治）